

Daichikyo News

# 大地協ニュース

大地協ニュース復刊 第26号

## いまこそ「町を歩こう」

大阪市地域福祉施設協議会の歩みと現代的課題

大阪市地域福祉施設協議会は1957年に発足（当時、大阪セツルメント研究協議会）しました。その背景には、世界と日本の民間社会福祉が、慈恵・慈善事業から社会事業、社会福祉、地域福祉へと発展してきた長い歴史があります。

現在、国は「地域共生社会の実現」を推進しています。地域共生社会とは、誰もが安心して暮らせる地域社会をめざすもので、地域福祉の理念に沿うものです。しかし、その背景には、自立論、互助の推進、地域福祉の政策化などの課題が存在します。スローガンは美しく響きますが、実際には財源や担い手の問題など、さまざまな限界があります。「共生」も同様に美しい言葉ですが、それはマジョリティ側の発想であり、外国籍住民、性的マイノリティ、虐待や貧困に苦しむ人々を強調しすぎることで、かえって社会意識の均質化、ステイグマ、社会的排除を生んでいます。公的責任であるはずの社会的排除や貧困問題への対応が、住民の熱意やボランティアズムを活用した下請け化（自己責任化）を促してはなりません。

セツルメントの潮流と社会的包摂

19世紀から20世紀にかけての貧困問題への取り組みを概観すると、セツルメント運動は「社会構造が貧困を生む」という視点を持っていたのに対し、COS（慈善組織協会）は「個人の責任と道徳的欠如」に焦点を当てました。すなわち、セツルメントは貧困の原因を「社会」に、COSは「個人」に求めたのです。

いまこそ町を歩こう ～ セツルメントしていますか ～

現在、全国で顕在化している不登校を例に考えると、その原因を個人や家族に求めるだけでは解決に至りません。本来、公教育から不登校児童生徒35万人もの排除を生む教育システムこそ見直すべきです。多様な学びの学校やフリースクールを新たに作ることで包摂しよう

とする現代において、一度排除してから社会的包摂を考える社会のあり方を問い直す必要があります。包摂は、排除があるからこそ必要になるのです。地域福祉施設職員は、個別支援に閉じこもらず、社会構造への変革をめざすべきです。そのため、組織や制度の外へ意図的に踏み出し、自身の眼差しを変え、見えないものを見ようとする力と、聞こえない声に耳を澄ませる感性を磨きましょう。当事者と呼ばれる人の中に、ネグレクトやヤングケアラー、貧困や虐待などの問題があるというように細分化と自己責任にするのではなく、社会への問いを同時に立てるべきです。町を歩くことは、社会の隙間にある問題との出会いです。

第29回全国地域福祉施設研修会の締めくくりの合言葉は「セツルメントしていますか」でした。第30回は、2026年2月21日、22日に東京で開催されます。みなさん東京でお会いしましょう。

石井記念愛染園 幼保連携型認定こども園

大國保育園 園長 西野 伸一

（日本地域福祉施設協議会/大阪市地域福祉施設協議会 事務局長）

発行元：NPO 法人 大阪市地域福祉施設協議会

企画委員会《 広報宣伝部 》

発行日：2025年4月 第26号

担当窓口：望之門保育園 佐伯 剛

TEL 6651-7741

Fax 6652-8841

大地協の最新☆情報は右記 →

QRコードをご覧ください。



大地協ニュースへのご感想・記事テーマリクエストなど

上記担当窓口まで皆様のお声を頂けましたら幸いです。

# 地域の中の施設として

5歳児と6年生がそれぞれ次の場所へと巣立ち、新しい子どもたちと保護者を迎え新たな年度が始まります。いつも咲き誇っていた桜の木が、今年は園舎建替え工事のためになくなってしまい、さびしさを感じています。さまざまな災害が起こり、また予見されている中で「安心安全」な保育所にしようと園舎建替えが決まり、子どもたちが大型ショベルカーに大喜びの中、工事は着々と進んでいます。



2月に行われた全国研修では、パネルディスカッションを担当となり、打ち合わせなど研修前から登壇者の方々のお話を聞き考えることができたこと、また、研修後も文字起こしをしながらもう一度皆さんの言葉を振り返り、噛みしめることができることは、私にとってとても貴重な時間となっています。パネラーの皆さんはそれぞれ立場、職種は違いますが、目の前の人に向き合って取り組み、だけどこれでいいのだろうかと考え日々を重ねておられること、一つひとつの種をまくように、草の根のような取り組みをされていることに、自分もできることをひとつずつしていこうと心新たにしています。ただそれだけではなく、基調講演で桜井さんから提示された、ひとりに目を向けるのはもちろんですが、その個別のケース一つひとつがなぜ、どうして起こっているのか、社会構造に目を向けることの重要性を、様々なデータから目に見える形で学ぶことができました。それを施設に戻ってどう現場とつなげていくかが私の今後の課題です。そんな2日間が一番うれしかったことは、意見交換会のお店でバイトしていた卒園生が「くまちゃん！」と声をかけてくれたことです！



旧園舎の取壊しの際には卒園生、その保護者、そして地域の方々が惜しんでくださり、これまでの先人たちの創ってきた地域の中の保育所であることを実感しました。外側がきれいになるだけでなく、今の保育の中身を振り返り、見つめなおしてみようと職員一同で取り組み始めたところです。新園舎完成は2026年3月の予定です。大地協の方々、地域の方々や周りの関係機関、卒園生、保護者、そして園児から問いや学びをいただいて、これからも地域福祉について深めていきたいと考えています。

社会福祉法人 育徳園  
育徳園保育所・子どもの家 施設長 隈元 まひる



第29回 全国地域福祉施設研修会 1日目  
町を歩こう～福祉の心を文化に～



全国地域福祉施設 パネルディスカッション



全国地域福祉施設 日本地域福祉施設協議会 名誉会長  
阿部 志郎 氏より メッセージ



NPO法人 大阪市地域福祉施設協議会  
会長 加藤久美子氏開会挨拶



町を歩こうロゴ入りチョコ



大地協加盟施設ポスター発表  
大地協HPからご覧いただけます★



基調講演 講師  
桜井 啓太 氏



意見交換会

# 第29回 全国地域福祉施設研修会に参加して

2025年2月14日・15日の2日間に渡り、東京・名古屋・大阪の参加者により、全国地域福祉施設研修会が開催されました。私自身は、全国研修会は初めての参加。そして、今回は、企画からの参加をさせて頂き、役員、大地協加盟施設の職員の皆様がこの研修会を実のあるものになろうと地域福祉について真剣に考える志、熱い思いや目標に向かって取り組み実践していく大きな力を傍で見させて頂き、学ばせてもらうこともたくさんありました。2日間に渡り、基調講演、分科会そして、夜の意見交換会でも東京、名古屋の方とお話することが出来、遠く離れた地でも同じ思いで活躍されていることに喜びを感じるとともに、大きなエネルギーを頂けたことに感謝します。当事者の方の生の声を聞き、言葉にして伝えることが出来るまでの様々な思いを知る事、そしてその苦しみを変えてくれるのはやはり「人」であること。私たちの地域福祉施設、それに携わる職員が出来ることは何なのか…。人々の暮らし、何気ない日常の中にも答えはある事を再認識できました。一人の力は小さいけれど、みんなの気持ちが同じ方向に向けば、大きな大きな力になっていく。みんなそれぞれ違いはあるけれど、生きていく中で楽しいこと、嬉しいこと、辛いこと、悲しいこと、悔しい事…様々な感情があるのは同じです。自分で乗り越えることも大事ですが、困っている時には、助けてくれる人がいることでどんなに心強いでしょう。ありのままの自分を受け入れてもらえることで大きな安心感となり、自信が持てることでしょう。

今川学園では、毎年発表会を行います。今年の年長さんは、「スイミー」を劇あそびとして表現しました。小さな魚のお話ですが、子どもたちはみんなで生きていくためにどんな気持ちをもって、どんな役割をもって進んでいくのかを表現してくれました。一人は不安だけど、みんなが居れば大丈夫！違っても大丈夫！みんなの心にある思いやりの気持ちを大切にしていって、みんなで力をあわせよう、ありがとうって言われたら嬉しい気持ちになる…そんな身近な小さなことが、当たり前の姿となり、安心して過ごせる世の中になってほしいです！毎日、子どもたちに囲まれた生活をする保育士の仕事は、本当に幸せを感じます。忙しくて大変さを感じることもありますが、子どもたちの笑顔で心が温まります。目の前にいる子どもたちが、これから生きていく中で、自分らしく、安心して過ごすことが出来、楽しさを感じられるような町になることを願います。私たちは、小さな力をいっぱい集めることが出来るよう人との繋がりを大切にしていきたいです。

毎年この時期、3月には卒園式を行い、子どもたちを小学校へ送り出します。6年生の子どもたちは、中学生になります。今年度も、立派に成長した子どもたちは、夢と希望をもって羽ばたこうとしています。嬉し涙を流して送り出し、また、新たなスタートに向けて職員一同進んでいきたいと思っています。

社会福祉法人 今川学園  
今川学園 園長 高野 員江



## 第29回 全国地域福祉施設研修会 2日目 町を歩こう～福祉の心を文化に～



分科会報告風景



日本地域福祉施設協議会 会長  
岸川 洋治 氏



名古屋キリスト教社会館  
栗田 謙治 氏 研修会総まとめ



次回 全国研修会 東京 開催を受けて  
興望館 萱村 竜馬 氏 / 野原 健治 氏



大地協の活動  
こちらから



分科会(第1～第5)  
第2分科会「多文化共生のまちづくり」

# 私にとっての“町を歩こう”

“町を歩こう”という言葉、前向きで軽快さが感じられる表現でありながら、今の地域福祉の課題を一言で現している言葉とも思えます。この言葉をテーマとして研修会を開催した運営側ではありますが、私自身の働きと重ねると非常にこの言葉の重みと実践する難しさを感じてしまいます。目の前の仕事に注力していると、徐々に自身の心が、そして施設が閉鎖的になってしまっていることに気づきます。メッセージの中で阿部志郎先生が『仏教用語では“施設”というのは“開く”“知らせる”という意味がある。』とおっしゃっていましたが、なかなかその意味につながるところに至らない現状に胸が詰まりました。自省の念に駆られながらも、自分の働きの中に制度の枠を超えたものをいかに見つけていく、作っていくのか、そのヒントはやはり町の中にあるのだと確信を持ちました。

そして今研修会のテーマに含まれるもう一つの言葉“福祉の心”とは何か。その問いを立て議論したことがありました。「思いやり」「幸せ」「寄り添い」「共生」等たくさんの言葉が出ました。福祉の心と聞いて感じることに、大切にしていることは皆様々だと思いますが、目の前の困っている子ども、しんどくなっている家庭（利用者）をどう支えるか、私はこのことを大切にしてきました。もちろんこの思いは今も変わりありませんが、この研修会を通してもう一つの視点を持つことの大切さに気づかされました。

なぜ子どもは困っているのか、なぜ家庭はしんどくなっているのか、その子やその家庭を支える時には、そこに至る背景を考えることが重要であることは意識していましたが、あくまでも自分の視点が個人（個別）化していることに留まってしまっていたように思います。それらの原因がどこにあるのか、視点を広げ地域化、社会化していくと、本来の原因はその子やその家庭が持っている問題ではなく、今の社会構造の中にあることが見えてきました。そう考えると社会にある問題を一つの家庭に、一個人に押しつけてしまっているのではないのかと感じます。普通をはみ出すと分けられ、規範を破ると叩かれる、曖昧な基準でしかないそんな言葉に縛られる社会。人が人と競い合い比べられ並べられ、負けられない失敗できない社会。執拗に生産性と自立を求められ、「助けて！」が言えない、届かない社会。今ある多くの社会課題に立ち向かっていくことは非常に難しいことだと感じてしまいます。

それでも私は、人が人を思いやる気持ちが大切にされる社会は作っていきけるのだ、と、この研修会を通して思うことができました。“町を歩こう”という意識を持ち続けることで、視点が広がります。今の社会に対して疑問を持つこともはじめの一歩なのではないかと思います。新たにしんどい人が生まれない社会のしくみを考えるのも大切な一歩だと思います。近隣の人に話しかけ、顔見知りを増やしていく。今の私にもできることは多くありそうです。歩いてみると、歩幅や歩き方の違う一歩を踏み出している人との出会いがあるかもしれません。この研修会に参加した仲間が今も歩いていると思うと、さらに踏み出す勇気が湧いてきます。来年の研修会（東京）では、様々な“町を歩こう”に出会えることを楽しみにしています。

